

三位一体後第十三主日礼拝説教
「敵を愛しなさい」ルカ福音書 6:27～36

【聖書箇所】

27「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言うておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にいなさい。28 悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。31 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。32 自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。33 また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるろうか。罪人でも同じことをしている。34 返してもらおうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるろうか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。35 しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。36 あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」

1 不可思議な教え

「あなたの敵を愛しなさい。」「あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬も向けなさい。」—キリスト者以外でも、一度は耳にした事がある非常に有名なイエス・キリストの教えです。しかし、また、この主の教えほど、不可思議なものはありません。一体、人間が敵を愛する事ができるのか？ どうして、イエスはこのような事を仰ったのか？ —よく知られているようで、しかし、また、実践する事が難しい「敵を愛しなさい」という主イエスの教えを、ルカによる福音書に聴いていきたいと思えます。

2 「敵を愛しなさい」！

主は仰います。「敵を愛し、自分を憎む者に親切にいなさい。」—「敵」「愛」「憎む」など抽象的な言葉だけですから、色々と屁理屈をつけて、聞き流す事もできるかもしれません。しかし、次の 28 節、29 節は非常に具体的です。「悪口を言う者に祝福を与え、あなたがたを侮辱する者の為に祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬を向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者には誰にでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から、取り返そうとしてはならない」

ここまで聞くと、私達は声をあげざるを得ません。「そんな事できる筈ありません！」主の教えは、あまりに理不尽に聞こえます。私たちは「悪口を言う者に祝福を祈る」ことは出来ないし、「侮辱する者のために祈る」ことも出来ない。「頬を打つ者にもう一方の頬を向ける」ことよりも、打ち返すことが、正義であり、それが当然のことと考えます。「上着を奪い取る者」からは取り返そうとします。取返してはいけないならば、一体、どこに正義

があるのかと言わざるを得ない。また、「求める者には、だれにでも与える」ことは出来ません。私たちは与える人を選びます。自分を侮辱する者には何も与えたくはないのです。それは、私達にとっては、当然のことです。「敵を愛しなさい」という命令以上に、私達が理解する事が困難な主の教えはないのかもしれませんが。

哲学者のニーチェは、このようにさえ言いました。『「敵を愛しなさい」という教えは、弱虫の、臆病者のための教えだ。キリストが教えた生き方は、勇気ある、強い人間の生き方ではない。このような事を教えるイエスという男は、まことに非現実的な理想主義者で、理屈ばかり言って現実には少しもこの世の戦いの役に立つ事を教えなかった』。

3 敵を愛せない事は罪

しかし、聖書は、この世の思い、人間の考えをはるかに超えた、神の正義を語ります。どんなに人間が、自分の敵を愛せない存在であっても、「敵を愛せない」という事は、『罪』なのです。神を神としない人の在り方なのです。

何故なら、私達の命は、神が造られたものです。私達は神の息を吹き入れられて生きる者とされた…と聖書は語ります。そして、神が「極めて良い」と喜ばれた一人一人なのです。ですが、それは、私達だけではありません。驚くべき事かもしれませんが、敵もまたそうなのです。敵もまた、神がお造りになった尊い命です。死んでよい命、滅んでよい命ではありません。

しかし、私達人間は、自分や自分の仲間、自分によくしてくれる人々は尊い存在と思えても、自分の敵を尊い存在とは思えず、滅んで当然だと思ってしまう。痛みを覚え、傷ついて当然だと思ってしまう。私達は、そう考え、そして実際にそのように行動する者でもあるのです。神の思いのようには生きることができない者なのです。だから、「敵を愛しなさい」という命令を実践する事ができない私達は、みな、神からすれば、罪人であります。「人間は一人の例外もなく罪人である」と聖書は語ります。

4 「敵を愛せない」世界の悲惨

罪人である私達、「敵を愛せない」人たちが作り出す世界は、「やられたら、やり返す」という原理のもとに建てあげられた世界です。愛には愛を、憎しみには憎しみを返す世界。しかし、人間というものは、他人の喜びは自分の喜びよりも大きく見える一方、人の痛み苦しみは自分よりも小さいと感じてしまう傾向があります。「隣の芝生は青い」とか、「他人の痛みは千年でも耐えられる」とも言われるのも、そういう人間の性質をあらわしています。ですから、この世界で、愛は伝わりにくい一方、憎しみは連鎖反応を起こし、大きくなっていきます。憎しみは、「二倍がえし」「三倍がえし」する人間を通じて、増幅して伝わっていくのです。

この憎しみの連鎖を防ぐ為に「**命には命、目には目、歯には歯をもって償わねばならない**」という掟が生まれたとも言われています。旧約聖書の出エジプトの中にも出てきます。この掟は、復讐がエスカレートする事を防ぐ為であったと言われています。被害の度合いを客観的に判断し、相手に与えた被害分だけ、加害者はその身で償わなければ

ならない…というもののなのです。

しかし、「やられたら、やり返す」という事に変わりはありません。それも悪い事に、復讐する力のない弱い立場の人々は、「目には目以下」の代償ですませ、力の強い人々の復讐は、「目には目以上」の代償としてしまうのです。弱肉強食の不公平な世界だからです。そしてその不公正はますます助長されていきます。悲惨な世界です。

私達自身も、個人的に憎しみ合う不幸な状況から、なかなか抜け出せない経験をすることがあります。そして、この現代世界もまた、巨大な憎しみ合いのスパイラルにはまって、抜け出せないでいます。今から17年前、2001年9月11日。ニューヨーク・ワシントン、同時多発テロ。即座に報復を宣言した当時のブッシュ政権が始めた「テロとの戦い」は、私達世界の悲惨さをよく表しています。アメリカは、この報復行動と一連の戦いの中で、同時多発テロで殺された人の何倍もの人々の命を奪いましたし、自軍からもテロ犠牲者を超える犠牲者を出しています。そして、更なる憎しみを生みだし、果てには、「イスラミック・ステイト」というかつてないほど残虐で大規模なテロを行う集団をも生まれました。現在はその勢力は下火となっているようですが、彼らによって政治が不安定化した中近東や北アフリカの国々から、膨大な難民が生みだされました。そして憎しみの連鎖はまだ続いています。

5 主イエスの十字架

しかし、「敵を愛せない」という私達人間の世界のただ中で、たった一人、敵を愛しぬいた人がいました。私は、先ほど、27節から29節には、私達が受け入れられない理不尽な事が書いている…と言いましたが、そこを繰り返し読みますと、私達の目の前に浮かんで来る人がいます。敵を愛しぬいたただ一人のお方—主イエスのお姿です。

主は、何の罪もないのに、十二人のうちの一人イスカリオテのユダに裏切られ、逮捕され、偽証によって有罪とされました。しかし、主は、イエス様はご自身を殺そうとする敵さえも愛されました。主は27節「あなたを憎む者に親切にきなさい」という言葉を実践されたのです。この「親切にきなさい」は直訳すると、「良い事をきなさい」です。主イエスは、ご自身を陥れようとする人々に対しても、繰り返し繰り返し、言葉と行いで父なる神の愛を示して、悔い改めに導こうとされていたのです。

28節「悪口を言う者に祝福を祈り、侮辱する者の為に祈りなさい」。「悪口を言う」という言葉は、「呪う」と訳す事ができます。主イエスは、ローマ兵も祭司長達も、ファリサイ派の人々、律法学者達、そして多くの群衆がイエス様を呪う言葉を吐きました。いや、主イエスの愛した一番弟子・ペトロでさえ、イエス様に呪いの言葉をはいたのです。十二人の使徒達も含めて全ての人が、主イエスを神に見捨てられた者として呪い、捨て去り、侮り、辱め、虐待しました。

29節「頬を打つ者には、もう一方の頬を向け、上着を奪う者には、下着をも与えよ。」十字架に架かる前、主はローマ兵に拷問されました。大きな釘が沢山ついた拷問用の鞭で叩かれ、身体のあちこちの肉が割かれ、血が流れました。肉体的な虐待だけではありません。頬も打たれました。頬を打つとは、当時、最大限に人を侮辱する行為でありました。主イエスはその最大限の辱めをも、黙って受け入れたのです。そして、上着も下

着も、なにもかも、持っている物全てを取り去られて、裸で十字架に釘で打ち付けられ、苦しみ呻く悲惨な姿を多くの人の前にさらされました。

しかし、主は、このように、ご自身を迫害する敵の為に、父なる神に祈られました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」。主イエスが仰っている「敵を愛しなさい」という言葉は、まさに、ご自身の十字架を語っておられたのです。

6 神の敵

ですから、結局、本来「敵を愛せない」人間は、「敵を愛しなさい」という主イエスが邪魔なのです。主イエスがそのような事さえ言わなければ、「愛してくれる人だけ愛し、憎しみには憎しみを返す」という自分達の正義に自己満足できるのです。自分達を正しいとして、自分達を神として、楽な道を生きることができます。だから、主イエスを排除したのです。

いや、2000年前だけではない。今も、敵を憎むことで、やられたらやり返すことで、主イエスを無視し続けているのです。排斥している、迫害している、裏切っているのです。呪いの言葉を吐いているのです。私自身も、主イエスを無視したり、私の目の前から主の教えを取り去ろうとしている事があります。「敵を愛せない」と開き直す私達は、どんなに敬虔な仮面をつけていようとも、「神の敵」である事に間違いはありません。

7 神の愛に降伏する

しかし、父なる御神は、そのような私達を、深く深く悲しまれます。敵を憎まざるを得ない私達を憐れまれます。「あなたがたは、憎みあい、滅びてよい存在ではない。私の御前に立ち帰って、私の命を生きよ」と痛みをもって叫ぶお方なのです。この父なる神の愛の叫びに押し出されるように、この世に来られた主イエスは、私達の罪を神の御前に償う為に、十字架にかかられました。私達の罪に縛られた不自由な命を解き放ち、神の御前で生きる者とする為に、十字架についてくださったのです。私達が、「敵など愛せるわけないだろ！」と、主イエスを十字架につけたその所で、まさに私達を赦す、私達の正義を打ち砕く、主イエスの愛をみます。

そして、この主イエスの十字架と復活を受け入れることこそ、「敵を愛しなさい」という主イエスの教えを受け入れ実践することができる唯一の道なのです。主イエスの十字架と復活であらわされた神の愛を受け入れる以外に、神の敵である私達が「敵を愛する」道はありません。

この事を説教で繰り返し説いた人がマーティン・ルーサー・キング牧師です。1960年代にアメリカで巻き起こった黒人差別に反対する公民権運動の指導者です。彼は、主イエスの「あなたの敵を愛しなさい」という言葉を、繰り返し、自分の教会の信徒達に取り次ぎました。彼が仕える教会と彼自身が、深刻な危機にあったからです。日々、白人から、差別され、罵られ(ののしられ)、暴力を振るわれる迫害のただ中で、黒人の人権を求めて声をあげていたからです。キング牧師も信徒達も、繰り返し、命を狙われていまし

た。不当に卑しまれ、激しく差別され続ける暮らしの中で、「敵など愛せる筈がない！」と怒りに任せて、敵である白人に暴力で応酬する道が見えてきます。差別を訴えても無駄だ、こんな不当な事を私達に強いる神は、私達を愛してなどいない…と神から離れてしまうかもしれない道もあります。どちらも、私達人間が進みやすい道です。しかし、そのどちらでもなく、迫害する白人たちに暴力でやり返そうとはせず、しかし、自分達黒人もまた神に造られ愛された命であるのだから、差別は不当である…と訴え続ける第三の道。この第三の道を信徒も自分も選び取れるように…と、キング牧師は「あなたの敵を愛しなさい」という教えを説いてきました。「今こそ、“あなたの敵を愛しなさい”という教えを実践する時だ」と信徒を励まし続けたのです。「あなたの敵を愛しなさい」という主イエスの教えが彼らの命綱でありました。

そのようなキング牧師は、説教で聴衆に次のように語り掛けています。「敵を愛することは、本来、罪人の私達には不可能です。しかし、敵を愛するようになるための、たった一つの道があります。それは、神の御心に心から屈服する事です。神に全面降伏する以外にはありません。“神さま、まいりました。あなたの愛が勝ったのです。わたしたちは負けました”。そのように父なる神に言うのです。そのように神の愛に負けることを知った時に、初めて私達はキリストの愛の勝利を知り、そして、このキリストの愛の戒めの勝利の力を知る事ができるのです」。

十字架の上にあげられつつも、敵を赦し愛するキリストの愛に、打ち砕かれて初めて、私達は、敵を愛することができるようになる…まさにその通りです。私達が、キリストの愛に全面降伏し敗北宣言をするとき、私達の内にキリストの霊が与えられるからです。そうして、私達は気づかされます。私の為に命を捨ててくれた主イエスは、私の敵の為に命を捨ててくださったのだと。私は、自分の敵にやり返そうとしていた、報復の為に、悪口を言い、呪い、ものをはぎ取っていたのは、敵ではなかった。イエス・キリストであったんだ。私達が神の愛に全面降伏し、白旗を掲げた時、その事に気づかされるのです。そのような気づきを通して、私達の内に与えられた聖霊、イエス様の霊の力により、私達は、自分の力ではできない敵を愛する事を実践する者とされていくのです。

8 決断する

だから、「愛する」事は、私達がする事ではないのです。聖霊—イエス・キリストがなさる事なのです。私達がする事は、決断なのです。「好き、嫌いは、感情だ。しかし、愛するというのは、決断だ。」と言った人がいます。私達人間には、好き嫌いがあります。私達が自然に感じる事です。しかし、愛するという事は感情ではない。自然にできることではなく、私達は愛する事を決断する、選び取る…というのです。「好きでなくても、大切にしよう」と決断して、実行する事はできるというのです。なるほど、自分の好きな人だけ愛し、嫌いな人を憎むのであれば、まるで私達は自分の感情の奴隷です。好きでない人にも親切にする事ができて、初めて、私達は自分の感情の奴隷にならなくてすむのかもしれない。

そして、愛するその事じたいは、聖霊の働き—キリストの霊の働きであるというのも、また、その通りだと思います。現実に関心ともに傷つけられた敵を愛するという事を無理に

行おうとする時、私達は身体に変調をきたします。そんな時、私達が決断できるのは、敵を愛する事かどうかではなく、神の愛に全面降伏するか、しないか…という事ではないでしょうか。神の愛に全面降伏し、神の愛を受け入れ、自分の負けを認め、白旗を掲げて、聖霊を受けて生きるか。それとも、自分の思いにとどまり、神に反抗を続け、神の敵のままでいるのか。前者の決断をしていけば、必ず、必要な時間をかけて、敵を愛する道へと続きます。一方、後者は敵を憎み続ける道です。神を選ぶか、自分を選ぶか。私達は日々、そのような決断に立たされているのかもしれない。

9 決断して愛に生きる

その決断をするとき、私達が決断する遙か前に、主イエスが決断してくださっている事を、思い出したいと思います。主イエスは、神の愛に押し出されて、この地上に完全な人間となって来られ、私たちの罪を全身に受け止めて、罪に対する神様の裁きを受け止めてくださいました。イエス様が、そういう決断をしてくださったのです。私たちを憎むのではなく、愛することを決断してくださったのです。そして、私たちは、その主イエスの決断の中にあり、今も主に愛されています。

私達を心を尽くして愛してくださる主イエスが、私達に「**敵を愛しなさい。憎む者に親切にいなさい**」と語りかけてくださっています。私たちに出来ないことを言って困惑させたり、絶望させたりするためではありません。そうではなく、「**私を、私の愛を信じて受け入れる時、私があなたたちの内に生きて働くのだ。そして、私が生きた愛を、あなた方も生きることが出来るのだ。今、私私を受け入れる決断をいなさい。そうすれば、あなたたちは、私のものとなり、私の力で敵を愛し、憎む者に親切にすることができるようになる**」と招いてくださっています。主イエスはいつもいつも私達を招いてくださっています。何度、この招きに答えることに失敗したとしても、主イエスは私達を愛し続け、招き続けることを諦めるお方ではありません。だから、私達も諦める必要はありません。何度でもチャレンジできるのです。

10 地上に現れた神の国

ニーチェをはじめ、多くの人々が、現実離れした何の力も持たないと退けた、「あなたの敵を愛しなさい」というイエス様の言葉。しかし、この言葉に支えられて、アメリカの公民権運動は発展していきました。神の正義に則った公平な社会を実現する為の非暴力の抵抗運動でした。人間扱いされていなかった黒人の方々が、少しずつ人権を認められるようになりました。しかし、指導者であるキング牧師は、運動の途中で凶弾に倒れます。が、公民権運動は、アメリカ合衆国全体に広がり、続いて生きます。そして、キング牧師が暗殺されてから、ちょうど40年たった2008年に、アメリカ合衆国で、最初の黒人大統領オバマ大統領が誕生しました。まだまだ、アメリカには大きな差別が残っています。オバマ大統領の後には、反動的なトランプ大統領が選ばれました。ですが、確実に40年前と、現代とでは、アメリカの人々の、世界の人々の意識は変わっていつていま

す。

40年というのは、世代が入れ替わる歳月です。神の愛に打ち砕かれ「敵を愛する」という決断に導かれた多くの人々を通じて、神の愛が、次の世代を育て、世界を変えていったのです。そうして「敵を愛しなさい」という主イエスの教えが、世代を超えて実践され続け、世界を変えました。神の愛の勝利しました。

横浜ナザレン教会と、教会に連なる一人一人もまた、キング牧師をはじめ、神の愛に生きた人々と同様に、神の愛に生き、「やられたらやり返す」憎しみの支配する国ではなく、神も愛が支配する場所を築くために、神に用いられます事を、祈ってやみません。